

インド洋西域における奴隷貿易の展開*

藍 澤 光 晴

要 約

インド洋西域における奴隷貿易の展開について、ザンジバル島とマダガスカル島を中心に考察する。19世紀、イギリスを先頭に西洋列強は奴隷貿易の禁止の方針を明確に打ち出し始めた。しかしながら、インド洋西域のアフリカ大陸東南部沿岸地域やその島嶼地域においては奴隷貿易が活性化した。そこで本稿では、ザンジバルやマダガスカルにおける奴隷貿易の考察を通して、19世紀インド洋奴隷貿易の一端を描写し、ヨーロッパ列強に組み込まれつつある過程、つまりインド洋西域の近世から近代への移行過程について考察する。

キーワード：ザンジバル、マダガスカル、コージャ、インド洋西域、

1 はじめに

19世紀、イギリスを中心として多くのヨーロッパ列強が奴隷制と奴隷貿易の廃止に向けて大きく舵を切ったにもかかわらず、インド洋西域、とりわけアフリカ大陸東部沿岸地域やその島嶼地域では、ヨーロッパ列強に組み込まれる過程において、奴隷貿易が一時的に活発になった¹⁾。ラブジョイによると、19世紀アフリカ大陸東部からインド洋を通じて、165万人以上が奴隷として輸出された²⁾。さらに、キャンベルの試算によると、1821年から1895年にかけて約40万人がアフリカ大陸東部からマダガスカル島（以下とくに断りがない限りマダガスカル）へ奴隷として輸出されたという³⁾。

*本研究はJSPS 科研費 JP22K01623の助成を受けたものです。

1) 鈴木英明『解放しない人びと、解放されない人びと—奴隷廃止の世界史』東京大学出版会、2020年、p.150。

2) Lovejoy, P. E., *Transformation in Slavery: A History of Slavery in Africa*, 3rd edition, Cambridge University Press, 2012, p.151.

3) Campbell, Gwyn, *An Economic History of Imperial Madagascar, 1750-1895: The Rise and Fall of an Island Empire*, Cambridge University Press, 2005, p.241.

19世紀インド洋西域では、ザンジバル島（以下ザンジバル）、マダガスカル、マスカレンヌ諸島（レ・ユニオンやモーリシャス島など）を中心として二つの矛盾する現象が起きている。すなわち、インド洋西域では、奴隷貿易と奴隷制の廃止を掲げたヨーロッパ列強による植民地化が進展しつつあったにもかかわらず奴隷貿易が活発になったのである。

19世紀前半、ザンジバルを中心としたアフリカ大陸東沿岸地域とその島嶼部の奴隷貿易と奴隷制は、イギリス海軍の監視の目をかいくぐって、19世紀中葉を過ぎてもなお続けられていた⁴⁾。奴隷の多くは、アフリカ大陸東部からザンジバルへと供給され、当時世界商品であったクローヴの生産を中心に従事することになった⁵⁾。ザンジバルで生産されたクローヴは、おもにアメリカのニュー・イングランド貿易商人の手によって北米大陸へと運ばれ⁶⁾、世界商品化にともない、その需要はさらに増大し、安定的な供給確保のために、黒人奴隷の需要が高まったのである⁷⁾。

マダガスカルもまた、他のアフリカ大陸東部沿岸地域と同様に、奴隷供給の役割を担っていた。18世紀以前のマダガスカルは奴隷を輸出する対象として描かれることが多かった⁸⁾。イギリス東インド会社によってマダガスカルからカロライナの米作プランテーションの労働力としての奴隷貿易が最盛期を迎える⁹⁾など18世紀以前のマダガスカルは、奴隷供給者として分析されてきた。しかし、19世紀に入るとキャンベルが指摘しているように、マダガスカルが、アフリカ大陸南東地域から受け入れた奴隷の数は増加し、次第に奴隷の需要者としての側面が表れ始める。

4) 鈴木は、東アフリカ沿岸地域の奴隷貿易と大西洋奴隷貿易との相違を示したうえで、東アフリカ地域の奴隷貿易が19世紀中葉まで残存し続けた理由について、奴隷貿易に従事したアラブ人貿易商のしたたかな戦略について描写している（鈴木英明「インド洋西海域と『近代』—奴隷の流通を事例として—」史学会編『史学雑誌』第116編第7号、2007年、pp.1-33）。

5) Alpers, Edward A., *Ivory and Slaves: Changing Pattern of International Trade in East Central Africa to the Later Nineteenth Century*, University of California Press, 1975, および, Sheriff, A., *Slaves, Spices and Ivory in Zanzibar: Integration of an East Africa Commercial Empire into the World Economy, 1770-1873*, Ohio University Press, 1987.

6) 富永智津子「ザンジバル社会とクローヴ生産—アラブ支配からイギリス支配へ—」山田秀雄編『イギリス帝国経済の構造』新評論、1986年、pp.353-403。

7) シーガル、設楽國廣監訳『イスラームの黒人奴隷—もう一つのブラック・ディアスポラ—』明石書店、2007年。

8) その他の代表的な研究として、Allen, B., Richard, *Slaves, Freedmen, and Indentured Laborers in Colonial Mauritius*, Cambridge University Press, 1999, Filliot, J. M., *La Traite des Esclaves vers les Mascareignes au 18^e siècle*, Paris, ORSTOM, 1974, Toussaint, Auguste, *La Route des îles : Contribution à l'Histoire Maritime des Mascareignes*, Paris, éd. S.E.V.P.E.N., 1968 などがある。

9) 下山晃「大西洋奴隷貿易圏とイギリス東インド会社」浅羽良昌編『経済史：西と東』泉文社、pp.27-58。

そこで本稿では、先行研究の動向を踏まえ、インド洋西域において、奴隷貿易と奴隷制の廃止を掲げたヨーロッパ列強による植民地化が進展しつつあったにもかかわらず、一時的に奴隷貿易が活発になった状況を具体的に確認し、19世紀インド洋西域の近世から近代の転換期を描写する。以上の描写を通して、インド洋西域、とくに19世紀にザンジバルやマダガスカルの奴隷流通を担っていた人びとを具体的に検討する。

地図1 インド洋西域



(出所) 筆者作成

2 ザンジバルの台頭—クローヴ生産と奴隷—

2-1 オマーン王サイド・ビン・スルターンによる覇権の確立

ポルトガルの海洋植民地である「インディア州」の崩壊直前の1620年代、オマーンではイバード派のヤアーリバ朝が成立した。1650年ヤアーリバ朝は、マスカットをポルトガルから奪還し、その後もアフリカ東部沿岸地域のポルトガルの拠点をつつと攻撃し、18世紀初頭には、モザンビーク沿岸地域でもオマーンの勢力が強まり、やがてザンジバル島はオマーンの支配下に入り、アフリカ東部沿岸地域からポルトガル勢力の排除に成功した。18世紀半ばに

は、ヤアーリバ朝の後にブー・サイード朝が成立し、1806年にオマーン王にサイド・サイード・ビン・スルターン（以下サイド）が在位すると、彼は、マスカットと同様にザンジバルも王都とし、両地域を頻繁に往来していた。しかし1840年には、彼はザンジバルに定住することになった¹⁰⁾。それにともないマスカットから多くのオマーン＝アラブ商人も移住することになる。

サイドがザンジバルに王都を築いた要因は、ザンジバルがもたらす莫大な経済的利益にあった。アフリカ大陸からは、象牙¹¹⁾、コパール、タカラガイ、皮革などがザンジバルに持ち込まれ、それらは世界市場で流通した（表1、2）。サイドは、アフリカ大陸からもたらされるこれらの商品の関税率を独占的に決定する権利「ムリマ Mrima」を整備し、西洋列強諸国の貿易商人との取引を独占する一方で、ザンジバルの輸出関税を引き下げ、ヨーロッパ、アメリカなどからの貿易商人を積極的に誘致した¹²⁾。とくに1833年サイドは、アメリカ合衆国とザンジバルに滞在しているアメリカ人の生命および財産の保護に関する条約「カピチュレーション」を締結し、ニュー・イングランド出身のアメリカ人貿易商が増大した¹³⁾。その結果ザンジバルとアメリカとの交易関係は密接になった（表3）。

10) 藍澤光晴「マダガスカルにおける十二イマームシニア派コージャの移住と経済活動」日本移民学会編『移民研究年報』第16号、2010年、p.137。

11) 19世紀欧米ではピアノ、ビリヤードの流行により、鍵盤とキューへの使用目的でアフリカ大陸からザンジバルを通して輸出された象牙が使用された。1800年の120トンから1875年には800トン以上も輸出された（Harms, Robert, "Indian Ocean Slavery in the Age of Abolition", Harms, R., Freamon, B., Blight, D., (eds.), *Indian Ocean Slavery in the Age of Abolition*, Yale University, 2013, p.6)。また18世紀から19世紀にかけて、アフリカからからの輸出は急増し、象牙の価格は急騰したという（カーティン、田村愛理他訳『異文化間交易の世界史』NTT出版、2002年、p.71)。さらにアフリカ大陸の象牙の需要の増加はそれを運搬する多くの奴隷を必要とされることにもなった。

12) Nicholls, C., S., *The Swahili Coast : Politics, Diplomacy and Trade on the East African Littoral, 1798-1856*, George Allen & Unwin Ltd., 1971.

13) 富永、前掲、1986, p.370。

表1 ザンジバルーアフリカ大陸間における交易（1859年）

（ザンジバルから大陸へ）

商品	取引総額(マリアテレジアドル)	%
綿織物	900450	69
ビーズ	115000	8
メタルワイヤー	60500	5
銃	66500	5
銃弾	50000	4
その他	111300	9
合計	1303750	100

（大陸からザンジバルへ）

商品	取引総額(マリアテレジアドル)	%
象牙	880000	51
奴隷	260000	15
コパール	150000	9
タカラガイ	150000	9
穀物	94000	6
皮革	80000	5
ゴマ	24000	1
その他	86500	3
合計	1724500	100

（出所）Sheriff, A., *Slaves, Spices and Ivory in Zanzibar: Integration of an East Africa Commercial Empire into the World Economy, 1770-1873*, Ohio University Press, 1987, pp.130-131より作成。

表2 ザンジバル輸出入（1859年）

（輸出）

商品	輸出総額 (マリアテレジアドル)
象牙	696668
クローヴ	264418
コパール	176542
タカラガイ	244360
皮革	121390
ココナッツ	95527
ゴマ	98800
地金	370000
合計	2067705

（輸入）

商品	輸入総額 (マリアテレジアドル)
綿製品	936324
ビーズ	103930
メタルワイヤー	34440
銃	89490
弾薬	42151
地金	750000
合計	1956335

（出所）表1と同じ、pp.132-133より作成（表1のザンジバルーアフリカ大陸間を除く）。

表3 国・地域別輸出入（1859年）

（輸出）

地域・国	輸出総額(マリアテレジアドル)	%
アメリカ	534100	25
英領インド	780900	37
フランス	247500	11
ドイツ	161000	7
イギリス	25050	1
アラビア	105200	5
西部アフリカ	230000	11
その他	74250	3
合計	2158000	100

（輸入）

地域・国	輸入総額(マリアテレジアドル)	%
アメリカ	568795	32
英領インド	708654	29
フランス	516451	21
ドイツ	455701	19
アラビア	79231	3
その他	24168	5
合計	2353000	100

（出所）表1と同じ、p.135より作成。

表4 ザンジバルの輸出入（1859/1860年）

輸出品	額(£)	摘要	輸入品	額(£)	摘要
象牙	146666	内アメリカへ 68421 (47%)	アメリカ綿布	93744	アメリカからの全輸入の74%
ゴム=コパール	37166	内アメリカへ 19684 (53%)	インド綿布	53777	
ゴマ	20800		イギリス綿布	37711	
タカラガイ	51444		米	38444	
クローヴ	55666	内アメリカへ 10105 (18%)	ビーズ	21879	

(出所) 富永智津子「ザンジバル社会とクローヴ生産—アラブ支配からイギリス支配へ—」
山田秀雄編『イギリス帝国経済の構造』新評論、1986年、p.372。

クローヴのおもな輸出先もまたアメリカであった（表4）。ザンジバルないしサイドの経済的基盤は、第一にアフリカ大陸から輸入された象牙などの再輸出を通しての関税収入、第二にザンジバル産クローヴの輸出による収益により成立していたのである。

2-2 ザンジバルにおけるクローヴ生産の端緒

18世紀後半、フランス領ブルボン島（現レユニオン島）から一人のオマーン＝アラブ商人、もしくは1819年に一人のフランス人が、持ち込み、栽培を始めたのが、ザンジバルにおけるクローヴ・プランテーションの嚆矢であるという¹⁴⁾。いずれにせよ、ザンジバルでは、クローヴの生産は行われていなかったが、クローヴが持ち込まれ、栽培が開始されたのは、もちろん経済的な理由であった。

もともとクローヴの需要がヨーロッパで高まったのは、14世紀半ばから流行したペストが原因である。ペストは、ヨーロッパ人の三分の一を死に追いやり、ヨーロッパ中世を崩壊に導いたことは周知の事実であろう¹⁵⁾。そのペストに薬効があると信じられていたのが香辛料である。胡椒、クローヴ、ナツメグなどの香辛料の一大産地であり、原産地である東南アジアのマラッカへ、ポルトガルを中心とした西洋列強はこぞって船を出したのである。いわゆる大航海時代の幕開けである¹⁶⁾。これらの香辛料のなかでもとくに薬効が信じられていたのがクローヴであった。大航海時代のロンドンやアムステルダムにおける記録によると、1ポンドあたり胡椒が8ペンスであるのに対し、クローヴの価格は72から180ペンスと非常に高い価格で取引されていたという¹⁷⁾。さらに、胡椒、ナツメグなどの価格が、暴落したにもか

14) Nicholls, *op. cit.*, p.82.

15) 村上陽一郎『ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊—』岩波新書、1983年。

16) 川勝平太「海洋アジアから見た歴史」川勝平太、濱下武志編『海と資本主義』東洋経済新報社、2003年、pp.1-20。

17) 千葉栄一、新谷明喜「クローヴ（ユーヅノール）の歴史」日本歯科医史学会編『日本歯科医史学会会誌』第27巻第1号通巻102号、2007年、p.7。

かわらず、需要が増加し、価格が上昇したのがクローヴであった。たしかにいまとなつては、ペストに対するクローヴの薬効は迷信程度にとどまるものでしかないが、近代初期のヨーロッパにおいては歯科治療の際の鎮痛剤として、水蒸気蒸留法によって抽出されるクローヴ・オイルが用いられており、現在の歯科医療の現場においても連綿と使用されているという事実¹⁸⁾からもクローヴが他の香辛料と異なり、とりわけて重宝されていたと考えるのも不思議ではない。19世紀にはアメリカで、クローヴが用いられるケチャップやソースの大量生産が開始され、その需要はさらに増大した¹⁹⁾。

食用の他に医療に使用され続け、価格も安定し、大きな利益をもたらすクローヴに目をつけたのが、サイドであった。18世紀後半に植樹され栽培され始めたクローヴの生産量は、1839年には31万5千ポンド（約9千フラセラ）から1856年には5百万ポンド（約14万3千フラセラ）と急増した²⁰⁾。やがて1870年代にはクローヴの世界市場の8割から9割がザンジバルから供給される程になった²¹⁾。

2-3 奴隷貿易を担った人びと

ーティップ・ティップ Tippu Tip とタリア・トーパン Tharia Topaー

以上、ザンジバルにおけるクローヴ生産量の増大は、労働力をザンジバルへと引きつける結果となった（表5）。クローヴは、開花直前の蕾を一つ一つ手で摘み取り、茎を取り除き、天日干しを行い、出荷される。とくに重労働となるのは、乾燥したクローヴを麻袋に詰めて、長い道のりを港まで運搬する作業であった²²⁾。その労働力の多くは、クローヴ・プランテーションの増大に伴い、アフリカ大陸から供給された奴隷であった。

表5 クローヴ生産量と労働者数

年	労働者数	クローヴ本数	収入（ドル）	輸出量（フラセラ frasila）	価格 / フラセラ（ドル）
1839	2625	52500	45000	9000	5
1843	8750	175000	144000	30000	4.8
1849	23000	460000	160000	80000	2
1856	41700	834000	357500	143000	2.5

（出所）表4と同じ、p.377.

18) 同上、p.2。

19) 福田賢治「世界の企業14—風格のあるケチャップ王国：ハインツ社—」『エコノミスト』毎日新聞出版社、第42巻第14号、1964年、pp.76-80。

20) Nicholls, *op. cit.*, p.284.

21) 富永、前掲、1986、p.369。

22) 富永智津子『ザンジバルの笛—東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化—』未来社、2001年、pp.109-112。

19世紀、アフリカ大陸からザンジバルに供給された奴隷の正確な人数について把握することは困難ではあるが、1840年代には年間1万3千人から1万5千人にまでのぼり、その大半はクローヴ・プランテーションでの労働力として供給され²³⁾、1886年にはザンジバルの奴隷は14万人、人口の約67%を占めていたと推定されている²⁴⁾。さらにフランスの植民地となったマスカレンヌ諸島での砂糖プランテーションの展開と重なり、アフリカ大陸東沿岸海域およびその島嶼地域における奴隷貿易は活況を呈していた²⁵⁾。

奴隷は、当該海域の他の商品とともに積載され輸送された。黒人奴隷を運搬するためだけに艀装していた大西洋奴隷貿易と異なり、アフリカ大陸東沿岸地域における奴隷貿易の実態は、他の商品とともに船に積み込まれ運搬されていた。18世紀中葉以降、イギリスでは奴隷制、奴隷貿易に対して、懐疑的な機運が高まり、当該海域においてもイギリス海軍による監視活動が本格化し始めたが、19世紀中葉を過ぎてもなお奴隷貿易は継続していた。政治的には1822年、イギリスはブー・サイド朝との間で、「モアスピー条約」が締結され、両者が協力し、奴隷船の拿捕と奴隷貿易従事者への処罰を行うことが取り決められていた。しかしながら、実際はこの奴隷貿易従事者の巧みな情報収集能力と奴隷を運搬する目的のみに艀装される奴隷船が存在しておらず、イギリスによる奴隷船の摘発が困難だったことなどに起因して、アフリカ大陸東沿岸海域では奴隷貿易もしくは奴隷制は残存した²⁶⁾。またその困難さが、クローヴ・プランテーションに投入された奴隷労働力の規模を正確に把握することを妨げている。

アフリカ大陸東沿岸海域において交易を担っていたのは、おもにインドのグジャラート商人とムスリムのオマーン＝アラブ商人であった。グジャラート商人は、ヒンドゥーのバニアン Banian/Banyan とムスリムのシーア派コージャ Khoja から構成されていた。船の所有者で、金融・海上取引に従事していたバニアン²⁷⁾ から前借金を受け取り、仲介業者のコージャが、アフリカ大陸やマダガスカル内陸の交易で活躍していたオマーン＝アラブ商人に資金援助をし、その対価として金、象牙、ゴムとともに奴隷を入手し、バニアンに卸しており、それぞれ役割の分担があった²⁸⁾。

23) シーガル、前掲、pp.207-208。

24) 富永、前掲、2001年、p.109。

25) カーティン、前掲、p.71。

26) 鈴木、前掲、2004年、pp.1-33。

27) 17世紀のグジャラートでは、グジャラート商人によって商業・金融組織が確立されており、遠隔地送金的手段としての手形制度もすでに発展していた（小谷汪之「17・18世紀グジャラートの政治経済」松井透、山崎利男編『インド史における土地制度と権力構造』東京大学出版会、1969年、pp.197-226）。

28) 藍澤、前掲、2010年、p.136。

アフリカ大陸東部地域の物産は、上記三つのクランの手を介して、ザンジバルへ運ばれ、最終的に奴隷以外は、ザンジバル産のクローヴとともに欧米列強へと輸出された。

(a) オマーン＝アラブ商人－ティップ・ティプの事例－

キャラバンを組織し、アフリカ大陸の内部へと隊商を編成し出かけたオマーン＝アラブ商人の代表としては、ザンジバルで生まれたティップ・ティプ Tippu Tip ことハメド・ビン・ムハマンド・アル＝ムルジェビが、挙げられる。彼は、裕福な奴隷商人であった父のもとで育ち、その父から奴隷商人としての手ほどきを受け、独立したのは20歳くらいのときだったという。1860年には自らで隊商を編成し、アフリカ大陸で象牙や奴隷を、現地の人びとと戦闘を繰り返しながら略奪したという²⁹⁾。1867年から約10年間で、タンガニーカ湖より西側地域へと勢力を伸ばし、大規模な「帝国」を築いたという³⁰⁾。隊商の編成のための費用を、彼は、同じムスリムであるコージャのタリア・トーパン Tharia Topan のもとを訪れ、前借金ついて相談し、彼を通して、前受金をバニアンから受け取っていたという³¹⁾。

(b) コージャとは－タリア・トーパンの事例－

タリア・トーパンはコージャを代表する人物であり、ザンジバルで活躍した。そもそもコージャとは、ロハーナ Lohana というジャーティ jati（職業集団）に属する人びとであり³²⁾、ヒンドゥーからムスリムへ改宗した人びとを指している³³⁾。ロハーナ・ジャーティとは、グジャラート地方の「港の商館でのカウンター業務係（仲介業者）」³⁴⁾の職業集団のことである。具体的に、オマーン＝アラブ商人からアフリカ大陸の物産である奴隷、象牙や金などを買い取り、バニアンに売却する仲介業者として活躍していた人びとである。

タリア・トーパンは、1823年グジャラートで生まれ、12歳の1835年にザンジバルに渡ったという。ザンジバルではヒンドゥーが経営していた企業に雇用され、ロバでクローヴなどの売買などに従事した³⁵⁾。その後自らで起業し、仲介業者として活躍し、最終的にオマーン王

29) 富永、前掲、2001、pp.86-97。

30) 藤田緑「リビングストーンに見る東アフリカのアラブ商人」東北大学『国際文化研究科論集』第7巻、1999年、p.65。

31) Whitely, W. H., *Maisha ya Hamed bin Muhammed el Murjebi yaani Tippu Tip Kwa Maneno yake Mwenyewe*, East African Literature Bureau, Nairobi, 1959, pp.29-33.

32) Rizvi, S. S. Akhtar and King, Noël Q., "Some East African Ithana-Asheri Jamaats (1840-1967)", *Journal of Religion in Africa*, Vol.5, Fascicule1, 1973, pp.12-27.

33) ペアソン、生田滋訳『ポルトガルとインド－中世グジャラートの 商人と支配者－』岩波書店、1984年、pp.43-44。

34) 篠田によると、ロハーナは、グジャラートにある100 近くのジャーティ（職業集団）の一つで、パンジャーブの地名「ローハンプル／ローホークト Lohanpur/Lohokat」に由来し、インド内外の交易センターで活躍する商人を指しているという（篠田隆「インド・グジャラートの宗派・カースト構成－1931年国勢調査の分析－」大東文化大学『紀要（社会科学）』第32巻、1994年、pp.201-232）。

35) Aldrick, Judy, *The Sultan's Spymaster: Peera Dewjee of Zanzibar*, Old Africa Books, 2015, pp.35-36.

が徴収する莫大な貿易関税を管理する補佐にも任命された³⁶⁾。なお、ザンジバルで仲介業者として成功した人物は、タリア・トーパンの他にナソール・ヌルマモード Nassor Nourmamode、アリー・タワーラ Ali Tahora がいた³⁷⁾。

以上の事例にある通り、クローヴ、金や象牙などは、ザンジバルを通して、欧米列強へと売却されていた。また奴隷は、欧米諸国で急増した象牙をアフリカ大陸からザンジバルへ運搬するために、アメリカで増大するクローヴの需要を支える労働力として、ザンジバルのクローヴ・プランテーションに供給された。

ザンジバルやマスカレンヌ諸島でのクローヴ、砂糖プランテーションは、欧米列強の要請に応えるかたちで展開し、奴隷はこれらプランテーションを支える労働力として需要が高まった。とくに世界商品としてのクローヴの生産が、オマーン王の経済的な基盤を成立させており、さらに、その生産を支えた労働力は、アフリカ大陸をはじめとした周辺からの奴隷によって賄われていたのである。このような状況のなか、マダガスカルにおける奴隷貿易がどのように展開していたのかを以下で明らかにする。

3 マダガスカルの奴隷制と奴隷貿易

3-1 コージャの移住

マダガスカル在住のインド系ムスリムであるコージャは、マダガスカル島に初めて移住してきた状況を、以下のように語り継いでいる³⁸⁾。

1865年にザンジバルからヌシ・ベ *Nosy-Bé* にきたシェリフ・ジヴァ・スルティ *Sherif Jiva Sourti*³⁹⁾、モロウ・カンジェー *Molou Kanjee*、アリバイ・タワーラ *Alibhay Tahwar* の3人が、マダガスカルにきた最初のコージャだ。とくに、アリバイ・タワーラ（ザンジバル生まれ）は、ザンジバルで金物やその他の商品一般を扱う商人、いわゆ

36) オマーン王は欧米の商人たちから徴収していた関税をグジャラート商人に委託する「関税徴収請負制度」を導入しており、関税請負者は入札によって決定されていた（藍澤光晴『マダガスカルにおける十二イマームシーア派コージャの経済活動』龍谷大学経済学研究科提出学位申請論文、2009年、p.42）。

37) Delval, Raymond, "Les Musulman à Madagascar", *Revue de Madagascar N° 37*, Tananarivo, 1963, p.21, もしくは Houssen, Dilavard, "Note sur la Communauté des Khoja Shi'ites de Tananarivo", *Archipel 17*, Association Archipel, Paris, 1979, p.72.

38) ロッシャン・ジャミール氏による聞き取りより（2007年8月18日、アンタナナリヴ市内のマドラサの校長室にて）。

39) なお再移住先での活動については、Charifou-Jewa の名前で、「昔からディエゴ・スアレスで食料品、織物 *tissus* やインドから輸入された商品を小売する商店を運営していた」と記録されている（フランスによるマダガスカルの各地域の文化、習慣、民俗、習慣などの調査報告『マダガスカル年鑑』*Guides Annuaire de Madagascar* 1908, p.326）。なお『マダガスカル年鑑』はマダガスカル国立公文書館 *Service des Archives Nationale*, Tsaralalana (ARDM) に保管されている。

る金物屋 *Quincaillerie* として成功しており、さらなる販路拡大のためにマダガスカルに新たな拠点、つまり「港でのカウンター業務係 *Comptoir*（コントワール＝仲介業者）」としてやってきた。その後彼は、ザンジバル、グジャラートとマダガスカル間の取引に従事し、ヌシ・ベの他にマジュンガ *Majunga*、メンティラヌ *Maintirano*、スアララ *Soalala*、ムルンダヴァ *Morondava*、ベルー *Belo*、チュレアール *Tuléar* へ、インドやザンジバルから持ってきた商品を卸すために、商店を次々と設立した。

上記証言は、19世紀にはヌシ・ベがザンジバルを中心としたインド洋西域の交易圏に組み込まれていたことを意味している。

コージャは、さらなる販路拡大のためザンジバルから当時フランスの保護領であったマダガスカルの北西部に浮かぶ小さな島ヌシ・ベに移住した。アリバイ・タワールは、コージャが「港でのカウンター業務係 *Comptoir*（コントワール）」、すなわち仲介業の事務所をマダガスカルに設置するために移動してきた。彼はやがてマダガスカル本島にも次々と「コントワール」を設置した。その成功に刺激され、続々とザンジバルから多くのコージャがマダガスカルに移住してきた。もちろん彼らは、ロハーナ・ジャーティとして仲介業に従事している。コージャは、マダガスカル北西部一帯の民族であるサカラヴァ人 *Sakarava* などから砂糖、紫檀、黒檀、タカラガイ *cowry*、金、ゴム、蠟などをバニアンに卸し、バニアンはそれら商品をザンジバル、ボンベイを通して世界市場に流していたのである⁴⁰⁾。1896年には、ザンジバルで活躍していたタリア・トーパンもまたヌシ・ベ、マルヴァイ *Marovoay*、マジュンガにも支店を設置した。なお現在でも彼らの多くが仲介業者（コントワール）としてマダガスカル経済に大きな影響力を持っている。

写真1 現在も「コントワール *Comptoir*」が記載されているコージャの商店の看板



（出所）2007年8月 アンタナナリヴ・ツアラララナ *Tsaralalana* 地区で筆者撮影

40) 藍澤、前掲、2009年、pp.58-59。

地図2 マダガスカル島の主要都市と主要民族



(出所) 筆者作成

3-2 マダガスカルの奴隷制

マダガスカルは伝統的に奴隷制が存在していた。1853年から1856年までの間にマダガスカルをたびたび訪れたイギリス人宣教師ウィリアム・エリス William Ellis によると、奴隷制度は「ドメスティックな制度の一つ」であったという。その売買についても詳細に述べている。借金、犯罪、さらに戦争による捕虜などの理由で奴隷身分となり、公的な市場などで男性は17ドル、女性は12ドル以上の価格で売買されており、奴隷は普段の生活で「消費」されるものであり、日常的に見受けられる光景だった⁴¹⁾。このようなマダガスカルにおける奴隷制は伝統的な奴隷の使役であり、ヨーロッパ近代により牽引されていた、いわゆる「高度に組織化されたビジネス」であった「大西洋奴隷貿易」とは異なっていた。シーガルは、大西洋奴隷貿易とムスリムによるそれとを比較しつつ、ムスリムの奴隷はおもにサービス分野、たとえば妾、コック、荷担ぎ人、兵士に用いられていたという⁴²⁾。

41) Ellis, Willian, *Three Visits to Madagascar During the Years 1853 to 1856*, Keystone Publishing Co., 1890, pp.144-162.

42) シーガル、前掲、pp.2-3。

一般的にマダガスカルも含めアフリカにおける奴隷制も、シーガルの指摘と同様に、家内奴隷として用いられており、さらにこれら家内奴隷は、奴隷が亡くなる前には開放しなければならず⁴³⁾、「ヨーロッパ人が、奴隷の定義として第一義的に用いる、当人およびその子孫による他人による永代所有」は許されず、「奴隷は一時的、臨時的身分」であった⁴⁴⁾。

3-3 植民地支配以前のマダガスカル島の政治的状況

18世紀から19世紀にかけ、おもにメリナ Mérima と称される民族から構成されているイメリナ王朝 Imérina が、マダガスカル島の「統一」を目指し始めた。イメリナ王朝のアンドリアナンプイニメリナ王 Andrianampoinimerina は、現在の首都であるアンタナナリヴ Antananarivo を中心に、周辺地域へ自らの領土の拡張に乗り出し、さらにその息子であるラダマー世 Radama I が、イギリスの軍事的支援を得ながら、全島「統一」に向けて本格的に着手し始めた。その後、ラダマー世の死後王位に就いた女王ラナヴァルナー一世 Ranavalona I は、19世紀半ばまでに全島のほぼ三分の二を支配下に置いた⁴⁵⁾。しかし、イメリナ王朝の直接的な支配は、アンタナナリヴを中心とした中央高地とそこから北東部へかけての地域に限定されており、コージャの多くが経済活動を展開していた南西から北西沿岸部地域にかけての広大な領域については、要所ごとにメリナの駐屯地が築かれただけで、現地首長の政治的・社会的影響力を弱体化するほどではなかった⁴⁶⁾。

1817年、イギリスは、ラダマー世のもとにモーリシャスの植民地総督であったファーカー Farquhar⁴⁷⁾ を派遣し、イメリナ王朝との間で友好通商条約を締結し、奴隷の輸出禁止を迫った。その見返りに、金、銀貨および銃や銃弾、軍服などの兵器を毎年供与されることになった⁴⁸⁾。なお親英的であったラダマー世は、晩年には排外主義政策へと方向転換をするこ

43) Ellis, *op. cit.*, 1890, p145.

44) 池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開—チェサピーク湾ヴァージニア植民地を中心として—』ミネルヴァ書房、1987年、pp.13-14。

45) エズアヴェルルマンドゥルウス、深澤秀夫訳「マダガスカル、1880年代から1930年代まで—アフリカの主体性と植民地征服・支配に対する抵抗—」『ユネスコ・アフリカの歴史』第7巻、同朋舎、1988年、pp.321-369。

46) 森山工「描かれざる自画像—マダガスカルにおける文化的統一性をめぐる言説—」日本文化人類学会編『民族学研究』第61巻第1号、1996年、pp.81-100。

47) ファーカーとその家族は、モーリシャスにける奴隷を使役する最大の砂糖プランテーションを所有していた (Campbell, “Madagascar and the Slave Trade, 1810-1895”, 1981, p.207)。

48) Ellis, Williams, *History of Madagascar, 2vol.*, 1838, pp.194-195, London, もしくは Brown, Mervyn, *Madagascar Rediscovered : A History from Early Times to Independence*, Damien Tunnacliffe, 1978, pp.134-143も参照のこと。

とになる⁴⁹⁾。

さらに、イギリスやフランスに遅れてマダガスカルとの交易関係を築いたニュー・イングランド貿易商は、イメリナ王朝との積極的な交易関係を構築することに成功した⁵⁰⁾。その結果ニュー・イングランド貿易商は、イメリナ王朝への武器や弾薬の提供を通じ、とくに19世紀後半には、マジュンガやヌシ・ベ、トアマシナ Toamasina、ムルンダヴァなどでは、積極的な交易関係を結ぶことになった⁵¹⁾。

一方19世紀半ばイギリスの軍事的援助を受けて全島統一に乗り出していたイメリナ王朝へ対抗するため、フランスは、マダガスカル北西海岸部、すなわちマジュンガやヌシ・ベの一部の首長らと、また彼らからの要請もあり、軍事的支援を柱とする条約を締結し、北西海岸部の一部を保護領にした。つまりこれは、マダガスカルにおけるイギリス勢力の伸張を阻止したいフランスとイメリナ王朝の北西部地域への軍事侵攻を阻止したい一部の首長の思惑が一致した結果であった。このように、イメリナ王朝と北西海岸部地域の首長らの争いは、マダガスカル島におけるイギリスとフランスによる植民地支配をめぐる主導権争いのなかで展開されていたのである。コージャは、イメリナ王朝の支配がおよんでいない海岸部、とりわけ南西から北西海岸部地域を中心に、すでに「コントワール」として商業活動に従事していた。それに対して、メリナ商人が、イメリナ王朝の直接的な支配がおよんでないこれらの地域において、商業活動に従事することは困難なことであった。イメリナ王朝は、「コントワール」としてインド洋交易で活躍するコージャからもたらされるであろう潜在的な利益を高く見積もる反面、イメリナ支配がおよんでいないマジュンガ南部からバレーにおけるコージャの商業活動が、やがてはメリナ商人の活動にとって障害になるとも考えていたようだ。メリナ商人はイメリナ支配がおよんでいないこれら西海岸部一帯で勢力を伸ばしつつあった

49) キャンベルが指摘するまで従来の歴史家たちは、ラダマー世の後を継いだラナヴァルナー一世女王（在位1828年～1861年）がイメリナ王朝を排外主義政策へと転じさせたと指摘してきた。すなわち妻のラナヴァルナー一世女王とは異なり、彼は、積極的に西欧からキリスト教、ローマ字、ヨーロッパ人技術者などを受け入れる親欧米的で非凡な王であったと多くの歴史家は評価してきた。しかしながら、キャンベルによると、ラダマー世は、イギリスに近づきつつも、西欧諸国によるマダガスカルの植民地支配から逃れようと晩年は排外主義政策へと方向転換をしたと指摘している。そのうえで、ラナヴァルナー世の排外主義政策とは、ラダマー世の晩年の政策転換を引き継いだものであったと結論付けている（Campbell, *op. cit.*, 2005, pp.59-60）。

50) アメリカは、ザンジバル駐在のアメリカ領事を通し、排外主義に転じたイメリナ王朝に対し交易の継続がなされるように積極的に働きかけ信頼関係を築いた（“Charles Wards to Queen Ranavalana I, Zanzibar, May 1, 1846”, pp.362-363. in *New England Merchants in Africa: A History Through Documents 1802 to 1865*, Boston, 1965, pp.362-363）。

51) Campbell, *op. cit.*, 2005, pp.181-212.

グジャラート出身の商人、つまりコージャに対し強い警戒心を抱いていた⁵²⁾。さらに1891年、奴隷貿易で白人 Blancs 一般に対して反感を抱いていた北西海岸部の民族サカラヴァ人が、西海岸部に支店を構えるドイツの国策貿易会社オズワルド O'swald を襲撃する事件がおきた⁵³⁾。フランスは、在地の民族、さらにはメリナ商人との商取引には慎重にならざるをえず、すでに西部地方一帯で商業圏を拡大していたコージャを、西部の住民やメリナ商人との仲介者、すなわち「コントワール」として利用した。イギリスやニュー・イングランド貿易商もメリナ以外の他民族との商取引に、コージャを「コントワール」として利用した。

一方コージャもまた、マダガスカルでの安定的な商業活動を目指してはいたが、1880年、北西部の一部族に略奪、殺害される事件⁵⁴⁾、翌年4月には、オマーン＝アラブ商人が、イメリナ支配のおよんでないマジunga南部で、サカラヴァ人の王に殺害された事件もあり⁵⁵⁾、商業活動に不安を抱えていた。

ニュー・イングランド貿易商と良好な関係を築いていた、さらにイギリスの軍事的支援を受けていたイメリナ王朝と、それらに敵対するフランスの保護領となっていた北西海岸部地域の首長たちの対立構造のなかで、コージャはそれぞれの勢力の「コントワール」としての役割を担ったのである。

1896年マダガスカル島はフランスの保護領、すなわち植民地となった。しかしフランスは、この時点ではまだ広大なマダガスカル全島を掌握できておらず、全島支配するまでに1904年まで9年もの時間を費やすことになる。そこでフランスもまた、植民地支配以前から経済的基盤を確立していたコージャを利用しつつ、全島支配を目指した。さらにフランス支配がマダガスカル全島におよんだ後もコージャを政治的、経済的に優遇し続けることになる⁵⁶⁾。

52) Grandidier, A. and Grandidier, G., *Histoire Physique, Naturelle et Politique de Madagascar, Vol.IV: Ethnographi de Madagascar, t. I: Les Habitants de Madagascar, Deuxième Partie: Les Etrangers*, Paris, Imprimerie Nationale, 1908, pp.562-563.

53) *Ibid.*, p.615.

54) *Ibid.*, pp.562-563.

55) 事件の原因については明確ではないが、奴隷をめぐる対立があった可能性は否定できない（エズアヴェルルマンドゥルウス、前掲、p.327-328）。なおマダガスカルのサカラヴァ人、ベティミサカラ人なども大型のアウトリガーを使用し、モザンビーク海峡を渡っている奴隷船から奴隷を略奪する行為を行っていたという（北川勝彦「移行期の西インド洋世界と東アフリカ海岸社会」野間春雄編『文化システムの磁場—16～20世紀アジアの交流史』2010年、p.64）。

56) 藍澤光晴「フランス植民地における移民政策—マダガスカルを事例として—」九州経済学会編『九州経済』第56集、2018年、pp.1-9。

3-4 マダガスカルへの奴隷輸入

1817年イメリナ王朝が締結した友好通商条約の際、イギリスに迫られた奴隷輸出禁止については、伝統的に奴隷を使役していたマダガスカルにおいて、好都合であったのではないか。つまり、マダガスカル島内では、イメリナ王朝がマダガスカル全島を代表する権力であることをイギリスと条約を締結することで誇示でき、イメリナ王朝による全島支配を国際的に認識させる狙いもあったのである。いずれにせよ、マダガスカル島内においては伝統的な奴隷制は残存しており、奴隷の需要がある一方で、ラダマー世はイギリスとの奴隷輸出に関する条約の締結については積極的であったと考えられる。マダガスカル島内における伝統的な奴隷制を維持するために、奴隷輸出禁止に関する条約をイギリスと締結することで奴隷の島内からの流出を防ぎ、島内のその需要を満たすことができるとイメリナ王朝側は判断したのである。しかしイメリナ王朝の領土拡大にともなう奴隷の需要、さらに輸出向けの米⁵⁷⁾とクローヴ生産にともなう奴隷の需要が、増加し、島内に現存する奴隷だけでは、それらの需要に対応することは不可能な状況になっていた。そこでイメリナ王朝は、あくまでも奴隷の輸出禁止に関する条約を締結しただけで、輸入に関しては禁止事項ではないと判断し⁵⁸⁾、モザンビークを中心とした地域からの奴隷の輸入を図った⁵⁹⁾。1873年には、マダガスカルのイギリス領事であったパッケンハム Pakenham は、マダガスカル宰相ライニライアリヴニ Rainilaiarivony に対し、わずか4年前の話だと断りつつ、モザンビークからダウ船によってマジュンガに連れてこられた16歳の少年奴隷が、メリナの役人に売却された事実を指摘している⁶⁰⁾。

1821年から1895年の間に、マダガスカルに輸入された奴隷は約40万人にも及んだという⁶¹⁾。現在でもマダガスカルには、マクア Makoa もしくはマザンビカ Masombika とよばれている人びとが存在している。マクアの多くが、19世紀中葉以降、アフリカ大陸東地域、現在のモザンビークから輸入された奴隷の子孫である⁶²⁾。

57) 19世紀後半マルヴァイでは輸出向けの稲作が盛んで、米をマジュンガに運搬するコージャの兄弟が確認されている（藍澤、前掲、2009年、p.67）。

58) Alpers, *op. cit.*, p.257.

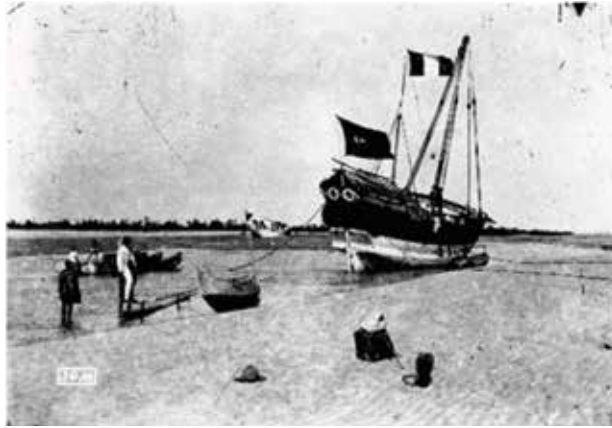
59) Campbell, *op. cit.*, 2005, pp.213-242.

60) Rakotondrabe, Tovo, "Note sur la Correspondance du Consul Pakenham (1867-1878)," Antananarivo, *Tantara, Revue de la Société d'Histoire de Madagascar*, n° 6, 1997, p.125.

61) Campbell, *op. cit.*, 2005, p.241.

62) マクア Makoa とはモザンビークからマダガスカルへ移住してきた民族を示すマダガスカル語である。現在、多くは西海岸一帯で漁民として生活している。なお文化的にもモザンビークと類似性が見られる（Rakotomalala, M. et Razafimbelo, C., "Le Probleme d'Integration Sociale chez Makoa de l'Antsihanaka", *Omalay sy Anio*, n° 21-22, 1985, pp.93-113）。

写真2 ムルンダヴァに停泊中のダウ船＝ブートル Boutre（1898年）



（出所）F.T.M. マダガスカル国立測地・地図製作研究所 所蔵

マダガスカル島内における奴隷の需要を満たすために奴隷を輸入していた事実は、以下の各資料からも確認できる。

1852年ヌシ・ヴァラヴ *Nosy-Voalavo*（北西海岸の港町）において、奴隷たちの多くは9月から12月の間にモザンビークから連行され、周辺の首長たちに、個体毎に値がつけられ売却された⁶³⁾。

メンティラヌ⁶⁴⁾には、マクア *Maquois/Makoas* およびカフル *Cafres* と呼ばれるアフリカ大陸から輸入された奴隷が2千人から3千人おり、彼らは農作業に恒常的に従事していた…⁶⁵⁾。

ヌシ・ヴァラヴと同じ北西の港町メンティラヌは、主要な奴隷市場になっており、そこには、キリマンジャロの南部のポルトガルの商館から10隻のブートル *Boutre*（二本マストの木造船＝ダウ船）が来ていた。積荷をサカラヴァ人やメリナ人が買っており、

63) Boudou, R., *La Côte Nord-Ouest de Madagascar : Notes d'Edmond Samat*, Bulletin de l'Académie Malgache, 1932, p.62.

64) メンティラヌには、奴隷商人がおり、1869年においても約2千人もの奴隷が輸入されていたという。またメンティラヌは黒檀の産地で多くのインド、コロモ、アラブ商人が貿易業に従事していた (*Rakotondrabe, op. cit.*, p.124)。

65) Curzon, C., *Maintirano : Renseignements Politiques, Ethnographiques, et Agricoles*, Journal, Officiel Tananarivo, 14 Septembre, pp.911-912 は入手できず、Vérin, P., "Note sur le Commerce et l'Activité Economique des côte Nord-Ouest de Madagascar au 19e siècle", *Revue Economique de Madagascar*, n°6, 1971, p.144 からの孫引きである。

そのなかに7歳と9歳の二人の女の子のカフリン *Cafrine*⁶⁶⁾ も含まれており、7歳は26ピアストル *piastres*、9歳は32ピアストルで、通常の値段より高値で売却された⁶⁷⁾。

以上は、マダガスカル島内ではサカラヴァ人やメリナ人が、アフリカ大陸、とりわけモザンビーク周辺（ポルトガル領東アフリカ）から輸入された奴隷を使役していたということである。彼／彼女らの多くは、家内奴隷、すなわち伝統的な奴隷労働力および農作業に従事する労働力として輸入された。とくに後者は、当時マダガスカルにおいて、モーリシャスへ輸出するための稲作生産⁶⁸⁾ とフランスへ輸出するためのクローヴ生産⁶⁹⁾ により奴隷の需要が高まったもので新たな需要である。

マダガスカルでの伝統的な奴隷制としての需要の他に、モーリシャスへ米を輸出するため、フランスへはクローヴを輸出するため、それぞれの需要に対応するための労働力として、マダガスカルで奴隷の需要が高まった。これらが、19世紀モザンビーク周辺からマダガスカルへの奴隷の輸入が促進した主要因である。

3-5 マダガスカルからの奴隷輸出

1817年以降も、マダガスカル島内における奴隷の売買は継続し、マダガスカル島からも奴隷は、ザンジバルのクローヴ・プランテーションやマスカレンヌ諸島の砂糖プランテーションを支える労働力として輸出されていた。その数は、明確には把握することは困難ではあるが一部の研究によれば、イギリスはもちろんのことフランスもまた奴隷貿易の禁止を法律で制定した後の1860年代においてもなお、年間3千人から4千人程度の奴隷が、輸出されていたという⁷⁰⁾。

友好通商条約が、イメリナ王朝とイギリスの間で締結されたにもかかわらず、マダガスカルから奴隷の輸出が続いていたのは、ザンジバルでもそうであったように、オマーン＝アラブ人やインド人が、さまざまな積荷の一つとして奴隷を商品として扱い、イギリス側の取締

66) Cafres もしくは Cafrine などはインドにおけるアフリカ出身者たちの呼称である（北川勝彦「移行期インド洋経済圏におけるアフリカ人の移動」橋本征治編『海の回廊と文化の出会い』関西大学出版会、2009年、p.104）。

67) フランス人の地理学者で19世紀後半にマダガスカルを訪問したアルフレッド・グランディディエールの1869年9月27日付日記より（Grandidier, Alfred, *Souvenirs de Voyage (1865-1870)*, d'après son manuscrit inédit de 1916, Tananarivo, Association Malgache d'Archéologie, 1971, p.26）。

68) Alpers, *op. cit.*, p.257.

69) マダガスカルにクローヴが移植されたのは1803年で、1835年には本格的に栽培され始め、それから10年のうちに6,610キロがフランスに輸出された（Campbell, *op. cit.*, 2005, p.189）。

70) Alpers, *op. cit.*, p.257.

りに関する最新の情報を入手し、対応した結果であった。さらにそのうえ、イメリナ王朝のマダガスカルにおける支配領土は、アンタナナリヴを中心とした中央高地と北東の港街であるマジュンガと東部の港町のトアマシナに限定されており、奴隷の多くが売買されたコージャの「コントワール」がある西部の港町にはイメリナ王朝の支配からは独立していたことも大きな要因の一つであった。

しかしその最大の要因は、奴隷は儲かる商品だった。エリスによれば、マダガスカルからの奴隷は、当時砂糖生産が盛んであったモーリシャスへと輸出されており、奴隷一人当たり、マダガスカルでは先述した通り男女別により価格は異なるが、モーリシャスでは100ドル以上で取引される利益の高い商品であったという⁷¹⁾。またそれ以外にマダガスカル側の要因は以下の通りである。

マダガスカルでは、やがて奴隷の供給過剰に陥ることになる。1820年現在アンタナナリヴの奴隷の数は、1万2千人程度であったが、1833年には5万人まで膨れ上がっており⁷²⁾、島内市場における奴隷の価格は大きく低下した⁷³⁾。それでもなお、1896年のフランスの植民地になった段階においても、マダガスカル全島では80万から100万人が存在していた⁷⁴⁾。

マダガスカル西部沿岸地域の各港では、ニュー・イングランド貿易商人を中心とした欧米の商人が銃や弾薬などの兵器、綿を売却していた⁷⁵⁾。その対価の多くは奴隷貿易から得られる利益で支払われていた。イメリナ王朝をはじめ、マダガスカルの各王朝は総じて外貨不足に陥っていた⁷⁶⁾。そこでこれら兵器や綿を、ニュー・イングランド貿易商人を中心とした欧米の商人は、グジャラート商人であるバニアンに売却し、バニアンからそれらの対価を現金で受け取り、兵器や綿は、コージャ、オマーン＝アラブ商人もしくはサカラヴァ人、メリナ人を介して、最終的に奴隷と交換された⁷⁷⁾。奴隷は、メリナ人ないしサカラヴァ人、オマーン＝アラブ商人、コージャの手を通じて、バニアンによって、モーリシャスを中心としたマスカレンヌ諸島の砂糖現場の労働力として輸出され、そこでは現金で取引は成立した⁷⁸⁾。ヨーロッパ、ニュー・イングランド商人らが、兵器や綿の対価として奴隷で直接受け取って

71) Ellis, *op. cit.*, 1838, p.153.

72) Grandidier, *Souvenirs de Voyage (1865-1870)*, p.32.

73) 1820年代に入るとイメリナ王朝内における奴隷の価格は最も高いときと比べ、10分の1以下まで下落し、その後1830年代以降、その価格は、1810年の半値くらいまでしか回復しなかった (Campbell, 1981, p.206)。

74) Rakoto, Ignace, "L'esclavage dans le Royaume de Madagascar au 19^e siècle", Rakoto, I. et Urfer S., (eds.), *Esclavage et Libération à Madagascar*, 2014, p.24.

75) Campbell, *op. cit.*, 2005, p.233.

76) Campbell, *op. cit.*, 1981, p.209.

77) Vérin, *op. cit.*, pp.141-143.

78) Campbell, *op. cit.*, 1981, pp.219-220.

いたわけではないが、彼らがマダガスカルに卸した商品、綿や兵器などの対価は、上記のように展開した奴隷貿易の利益の一部から支払われていたのである。とくにメリナ王朝の島内統一の動きに対して各民族では銃や火薬などの兵器の需要が高まっていた。

4 むすびにかえて

19世紀、インド洋西域、とりわけザンジバルやマダガスカルでは奴隷の需要が一時的に高まった。その多くが、モザンビーク海峡を挟んだアフリカ大陸東部地域から輸入された。ザンジバルにおいて、欧米列強で急増するクローヴや象牙の需要に対応するため、アフリカ大陸南東部から多くの奴隷がザンジバルに供給された。また、マダガスカルにおいても植民地支配をめぐる英仏の思惑のなかで仲介業者であるコージャが利用された。さらにマスカレンヌ諸島の砂糖生産を支える労働力として、おもにフランスに輸出するためにマダガスカル産クローヴ生産を支える労働力として奴隷の需要が高まった。一方、アメリカのニュー・イングランド貿易商人の主要な商品であった兵器などの対価は、マダガスカルの各王朝が奴隷輸出で得た利益で決済していたのである。

ここで多岐にわたった議論を以下に整理してみる。

- ① オマーン王サイドによるザンジバルの王都化にともないアフリカ大陸東部沿岸地域とその島嶼の再編は進んだ。とくに世界商品としてのクローヴの生産は周辺のアフリカ大陸東南部から多くの奴隷がザンジバルへ輸出された。
- ② 奴隷貿易を担っていたのは、グジャラート商人であるヒンドゥーのバニアンとムスリムのコージャ、そしてオマーン＝アラブ商人たちであった。金融・運送業務を担っていたバニアンからの前借金を受けた仲介業者のコージャが、アフリカやマダガスカル内陸の交易で活躍していたオマーン＝アラブ商人からさまざまな商品とともに奴隷を入手し、バニアンに卸していた。
- ③ マダガスカルにおいては、伝統的な奴隷制による奴隷の需要とモーリシャス向けの稲作、フランス向けのクローヴの栽培に従事するための奴隷の需要が発生し、モザンビークを中心としたアフリカ大陸東部地域から奴隷が輸入された。
- ④ ヨーロッパとアメリカのニュー・イングランド商人が持ち込んだ商品の対価は、奴隷の輸出による利益で賄われていた。外貨不足の状態にあったマダガスカルでは欧米の商人たちは、銃や弾薬、綿などをバニアンに卸し、現金を受け取っていた。バニアンに卸されたこれら商品は、コージャ、オマーン＝アラブ商人ないしサカラヴァ人の手を介して、最終的に奴隷と交換されて、バニアンによっておもにマスカレンヌ諸島で現金化さ

れ、決済された。このような奴隷貿易をめぐるバニアン、コージャ、オマーン＝アラブ商人の各クランの関係は、ザンジバルにおいても見られた利害関係でもあった。

近世から近代にかけてインド洋西域では、アフリカ大陸からザンジバルへ象牙を運搬するための労働力として、ザンジバルではクローヴの大規模な生産を支える労働力として、アフリカ大陸東部地域の奴隷が必要とされた。つまり、奴隷は、欧米諸国の消費を支える世界商品を生産する生産過程に投下され、商品連鎖につながっていたのである。

一方マダガスカルにおいてもコージャが初めて移住したという19世紀中葉以降、奴隷貿易も活況を呈することになる。マスカレンヌ諸島、とりわけモーリシャスへ輸出するための米とフランスへ輸出するためのクローヴ生産に必要な労働力として、アフリカ大陸東部地域からの奴隷、すなわちマクアとよばれる人びとに依存した。さらに、国内の各民族が島内統一を志向し始めたメリナ王朝に対抗するため、ニュー・イングランド商人の主力商品であった兵器購入の対価は、マダガスカル島内で供給過剰気味になった奴隷を砂糖生産の労働力としてモーリシャスなどのマスカレンヌ諸島へと輸出したその利益が、充当されることになった。

